

---

# 二度と来ない春

幸恵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二度と来ない春

### 【Nコード】

N2534L

### 【作者名】

幸恵

### 【あらすじ】

組織壊滅後の灰原哀の話。

工藤君が元の姿に戻り、蛻の殻になった灰原。しかしある日、灰原は誘拐されてしまう…

CPは、恋愛的には新蘭で、話の内容は哀の気持ち。

恋愛は新蘭です。最後は哀ちゃんもいい方向に持って行きたいと思います！

FILE：1 もぬけのから（前書き）

どうも。小説書かせていただきます、幸恵です／＼〇／

駄文ですが、よろしくお願いします！

FILE:1 もぬげのから

こんな想い……もう封印しなきゃね ?

パソコンの前の私は、顔を手の中に埋めた。

また暗い研究室の中。

このままだと目が腐るかも。

もう外は春なのに……胸の中には二度と春が来そうにない。

彼が工藤新一に戻って、一ヶ月経った。

工藤君は蘭さんに見事に想いを伝え、晴れて恋人同士。

私といえば、宮野志保に戻ろうと思いつつ、ずっとこのまま。  
前はサメだったけど、  
今はサメ以下かもしれない。

彼女に見せる彼の笑顔が苦しくて、ずっと研究室に籠りっぱなし。

今は先の見えない生き方に、少し不安が見えている。

私の生きがいは工藤君。

私を生かしてくれていたのは、工藤君。

いつも負けそうな時、私を支えたのはあなた。

あの黒い組織はなくなった。

激しい戦い、殺し合いの末に。

解毒剤のデータを収集し、何ヶ月か費やし完成させた。

工藤君と私を繋ぐ糸も何もなくなった。

ただ、昔同じ境遇に陥った者同士。

工藤君が解毒剤を飲んで、元の身体に戻った時、とても嬉しそうな顔をしていて、私まで幸せになった。その時だけは。

もう一度耳元で囁いてほしい。

『運命から逃げんじゃねーぞ』

『俺が守ってやつから』

そしたら頑張れる気がするから…

FILE：1 もぬけのから（後書き）

第1話！

内容バラバラ、短いです……（；、）

次回もよろしく願います！

FILE：2 春が嫌い

博士、まだ帰ってないの…？

チクタクと音をたてる時計に目をやる。

辛い想いと共に、ついつい寝てしまった。

気がついて目を覚ますと、上には毛布がかけてあって、それが博士だということはすぐにわかった。

……きつと買い物ね…

最初はそう思っていたのだけれど、さすがに6時にもなると心配になってきた。

7

段々お腹も空いてきて、冷蔵庫に何かないかとキッチンに向かう。

私はいつだって低血圧な顔。

だから工藤君には、「お前も腹とか空くのか？」なんて言われたこともあった。

その度に可愛くない私は、ムツとした顔をするのだった。

私だって、生まれた時から普通の環境で育っていたら、こんなにひねくれることもなかったかもしれない。



「あ……」

キッチンの台の上に、メモが置いてある。  
メモを見ると、博士の字。

『哀くんへ。』

友人とちよつと食べに行つてくるのでな、買い物をして、ご飯でも食べてくれ』

「ふう……」

ため息が出る。

買い物……？一応冷蔵庫を覗いてみるけれど、やはり中には何もなかった。

我慢しようかしら

そう思ったけれど、空腹が辛くて、結局買い物に出ることにした。

ダウンを羽織り、外に出る。ドアの向こうから漏れる春の光は、なんて眩しいんだろう。

私は黒、光は白。

いつもこんなことを考えてしまつ………独りになると尚更。

私は春が嫌い。

寒く、皆が嫌う冬を追い払うようにやって来る、暖かい春が。

鍵をかけ、今、歩き出そうとした時だった。

「なんや、ねーちゃん。どこか出かけるんか？」

関西弁の色の黒い男が見えたのは。

### FILE：3 心配

「あ、見て見て！工藤先輩よ！本当に帰ってきたのねー！」

校内を歩く俺には、黄色い歓声が飛び交う。確か、校庭を歩いた時もこんなだった。

俺、工藤新一は、小学一年生から高校二年生の身体へと戻った。戻るなり、休学中だった帝丹高校へもすぐ通った。

最初はみんな、またすぐ何処かへ行くのだろう、と特に気にはしなかった。

しかし一ヶ月が経ち、当分の間いる事がわかると、あの歓声が沸き立ち始めた。

俺もまだ有名人だったんだな。

これからは、思いつきり推理に没頭でき、自己主張ができる。

それも良かったことだが、何より良かったことは……蘭とのこと。帰るなり俺は蘭に想いを伝えた。

蘭は笑って「うん」と言ってくれた。

今は『恋人同士』だ。

蘭には、まだコナンだったことは言っていない

組織とのことも、今まで俺が戦ってきたものことも知らない。

ただ、ニュースで『大きな組織が潰れた』としか。

灰原が元の姿に戻ったら、言おうと思う。

その時には、蘭の怒りを買うだろう。回し蹴りも、涙も。

その時が来るまで、自分の心の中に秘めておく。

そんなことを考えている俺だけど、2・Bの教室に入ると、くだらない話で盛り上げられるクラスメートがいる。

そして何より、

「新一っ！」

蘭が飛んできて、いつもの太陽のような顔で笑いかけてくる。

かわいいじゃねーか…

これを見ると、つい、俺まで笑っちゃまう。

そんな蘭を見て考えるのが、なぜか正反対の灰原の事。

アイツ……最近こもってばっかだ。

おかしくなってきたのは、俺が解毒剤を飲んだ後。

俺は気になって顔を出しに行ったが、拒否された。

博士は、子供のような灰原のことが相当心配なのだろう。

俺に相談をよくする。

しかし今の灰原は、俺にもどうしようもない。

蘭はいつも痩せ我慢するが、わかりやすい。けど、灰原の場合は…  
…何も表に出してこない。理解不能な女だ。

俺はアイツにも幸せになってもらいたい。  
今まで経験してきた辛さを消し去れるくらいに。

FILE:3 心配(後書き)

蘭ちゃんって、本当にいい子ですよね(´・`・´)  
よくあんなに新一を待てるなあって、いつも思います。

2話目、極短でした！

そろそろ勉強しなくちゃ…です、バリバリ学生です。

## FILE：4 みんなの気遣い

「あ、あなた…！」

そう驚いた私の先には、工藤君の親友、良きライバルの浪花の高校生探偵、服部平次がいた。

なんでここに……？

驚きと戸惑い。

「おお、ねーちゃん！」

いつもの大阪のノリで早速挨拶をする服部君は、帽子とGジャンに黒のハイネックだった。

この人の目当てはわかっている。

「工藤君に用なら……」

「ああ、ちやうちやうー！」

私はまだ言わないうちに、服部君は手を振った。

「ねーちゃんに用があったんや」

「私…？」

なぜ私なのか、よくわからなかった。特に話したこともないし、これといった接点もない。

用なんて…あるはずなのに。

これから買い物だというのに…

突然来ないでほしいわ。

そういえば、前に工藤君も同じ様な愚痴を言っていた。いつもアポ無しで来るんだって……。けど、なかなか憎めないヤツだって…

「とりあえず上がって」

仕方ないので、家に入れることにした。

「すまんなあ！」

「で、何？服部君」

座らせて、コーヒーを差し出すと早速切り出した。

「ああ……あんたんこのお家の中を拝見したくてな、なあ……？」

曖昧な言い方をする服部君を、ただじっと見つめる。

家の中を見たいだなんて、バレバレの嘘をつかないでもらいたい。

「…で、本当は？」

「うーん……」しばらく服部君は唸ったが、決心したように話した。



「工藤に頼まれたんや…」

「え…?」

『工藤』という言葉が出ると、鼓動が早くなった。

「工藤が、電話で最近ねーちゃん引きこもってばっかや言つて、自分はおかんから、見に行ってくれへんか、って頼んできよったんや」

私は切なく俯いた。

…バカ…

私に気を遣って、家に通いに来てたのはわかってた。けどその度に、私は追い返してた。

会いたくなかった。

嬉しかったけど、素直に喜べない。

蘭さんと付き合ってるのに、私への当てつけのよつにやってくるのが。

彼は本当にお人よし。

何で私にも気を遣ってくれるの？

彼も蘭さんもお人よし。

そんなお人よしに、私は救われていた。

お似合いよね　　?あの二人。

「……ねーちゃん。これ、郵便に入っとったで」

しばしの沈黙が続いた後、服部君がいつもと変わり、静かな声で言った。

また……遣わせてしまった。

封筒を受け取る。

中は結構パンパンみたい。封筒がはち切れそう。

裏を見ると差出人は、

歩美

元太

光彦

だった。

FILE：4 みんなの気遣い（後書き）

書き溜めておいて、なんとか更新できました（：|：）  
服部平次出してみました。

関西弁へたくそ…ですね。

東北生まれ、東北育ちなもので。東北の訛りは得意です！

次回もよろしくお願いします。

FILE:5 聞いてほしくなかった

差出人の名に驚きながらも、封を開ける。

最近学校に行っていないから、あの子達の名前は久しぶりだった。

『灰原さんへ  
こんにちは！

私たちは、この春で二年生になりました。もちろん灰原さんも！

ところで、最近灰原さん、学校来なくて寂しいな……何かあったの？  
コナン君も海外に引っ越しちゃったのに、灰原さんもいなくなっ  
たら……。

ごめんね、これは言うてはいけないんだよね。

学校では新しい友達もできて、毎日楽しいよ！  
灰原さんも一緒に遊ぼうよ！

学校で待ってるね。』

あの子達の手紙を読むと、持つ手が震えた。

まるで様子や顔が浮かぶようで。

「……………」

私は、何をしてるんだろう。

あの子達は私のことなんか、心配してくれてるのに、私は殻に籠ってばかりだ。

彼らの手紙は、私の今の救いだっただ。

一人なんかじゃない。

居場所なんて……1つあればいいのに。

…けど、まだ行く訳にはいかない。

今の私は黒いから。

あの子達と会っても、まともにつき合えそうにない。

あの子達まで黒く染めてしまいそうだから。

「なあ……ねーちゃん」

沈黙が続いていたが、それも終わった。

服部君がいつになく真剣な顔で、私を見てきた。

「……………何よ？」

弱気な自分は、わざと強い口調になってしまっ。  
彼の顔は、私を嫌な予感へと追い込んだ。

「自分……………」

「工藤が好きなんか？」

「言っで欲しくなかつた事なのに」

FILE:5 聞いてほしくなかった(後書き)

極短でしたが、次回もよろしく願いします！

FILE:6 告白の瞳

服部君の質問に息が止まった。

『自分……………』

工藤のこと好きなんか？』

手紙の余韻もまだ残るのに、  
頭の中で、苦しいほどに蘇る。

こんな事に答えたからって、どうなるわけでもない。  
私の願いは叶ったことがない。

私は工藤君が好き。

服部君は私の事を見透かしている。きっと。  
何でそんなに静かなの…？

私は服部君のように、表舞台じゃない。  
幼なじみの遠山さんが当たり前のように隣に居て、いつも馬鹿げた  
話をしあって、自然に好きになっていく……………



私と関わる人は大抵、血で繋がっている。殺し合いや、毒薬などの組織の上。

そう 生まれた時から。

そんな恋愛ドラマみたいな物じゃないの。

それをわかってるの…？

あなたの質問は、酷すぎるのよ。

虚ろに開いた私の瞳をじっと見つめ、服部君は言った。

「俺は…和葉が好きや」

思いがけない台詞。

見ていれば、服部君が好きなことくらい簡単によめる。けど、自分自身から言ってくるなんて、思いもしなかった。

服部君は照れずに、目を逸らさない。

「…あら、そう。よかったわね。私には関係ないし？」

胸に突き刺さる何かをこまかすように私は言った。

「俺は知らんうちから、好きになっとった。掛け替えのない大事な、大好きなヤツや。」

もっかい聞く。

「……………あんたは、工藤が好きなんやな？」

「コーヒーに湯気はもう立っていない。」

「もう……………言い逃れはできないのかもしれないわね。」

服部君の真剣な瞳を見返すと、私は微笑した。

「……………ええ……………」

FILE:6 告白の腫(後書き)

第5話の歩美ちゃん達からの手紙、どうでしたか……?なんか、変な気が……。

次話は平次を書く予定です。

よろしくお願いします!

FILE：7 悩める部外者（前書き）

関西弁、できるだけ気をつけましたが、変なところが多いと思います（・・・；）

ご了承ください！

FILE：7 悩める部外者

ガタン

俺は今、大阪行きの新幹線に乗っとる。まもなく発車や。

動き出すなり、外を見つめた。

阿笠博士んとこ行っとったが、あんな事、聞かん方が良かったやろか……

工藤が好きなんか、やて。

あのねーちゃん見てたら、工藤への思いが痛いほどプンプン伝わってきたよって。

聞かずにはおられんかった。

いつも恋愛に鈍感な自分が言うのもなんなんやけどな……

手紙を読んで、感動してるねーちゃんは、今まで関心は特になんやなかったが、人間やと思った。

工藤は毛利のねーちゃんが好き。

俺も可笑しくなってしまうほどに、や。

ねーちゃんのことになると、必死になしもつて、探偵の時の様な冷製さも失ってしまう。

あの、ちっこいねーちゃんには気の毒やけど、片想いは叶う事はないやろな。

ようわからんが、今まで辛い思いもぎよーさんしてきはったようや。その分だけ、幸せになってもらいたいやないか……

きつと工藤も、それを願うと思う。

『自分の居場所がない』

そう言っとなが、工藤は確かに心配しとなが。

あんな哀しい目をせんでほしい。

色々考えていたようやけど、俺は結局、聞き出せんかった。

ねーちゃんの胸の内。

まあ…ほとんど関わり合いもないから、しゃーないけど。

と、その時。

ブルル…

携帯の着メロが鳴った。メールや。

なんや？思て、携帯を開くと　　和葉からやった。

「平次、今どこいてるん？通天閣の前で待ち合わせ言つてたやん！めっちゃ待ってんで！」

……………か、和葉との待ち合わせ！！」

内容を小声で読み上げると、やっと思い出した。  
今日は、美味しいお好み焼き屋行く言つて、待ち合わせしottaんや！！

見事に忘れottaわ……

メールが着たばかりやゆづのに、次は電話。  
もちろん、和葉からや。

和葉っちゅう文字が映って、思った。

俺も決着つけないあかな……



FILE：7 悩める部外者（後書き）

1話ずつ着々と進んでいって、一安心です…（…）

次回もお楽しみにしていただけると嬉しいです。

FILE : 8 幸福の訪れ（前書き）

今回は、蘭ちゃんです！

新哀派の人にはあまりオススメできません…

FILE : 8 幸福の訪れ

電話が鳴る。

いつものように、探偵事務所を掃除していた時のこと……  
冬もようやく終わり、春の兆しが見えはじめた3月。

電話は、探偵事務所ではなく、携帯だった。

誰だろう………？

サブディスプレイには、公衆電話の文字。公衆電話からかけてくる人って…

新一………？

そんなわけない………はずだけど………

ここ3ヶ月、音信不通だった。今度こそ私にも生きてるかわかんない。

3ヶ月の間、私は泣いていた。  
幼なじみで、初恋で、今でもずっと想い続けている、大好きな人。

私は胸が躍るのを実感し、息を吐くと、携帯に出た。

新一であってほしい。

新しい気がする。

2つの想い。

「もしもし……」

恐る恐る言った。

『よお、蘭』

新一の声が電話越しに聞こえた。

「新一っ……!!」

待ち焦がれた、新一のあったかい声を聞くと、涙が溢れてきた。

本当に新一だ……

『おめーとこうやって話すのは、久しぶりだな』

「何してたのよ……!今まで……!」

『蘭……』

「ずっと……ずっと心配してたんだから!!」

喉がほてる。涙声のまま、新一を怒った。

「もう……死んじゃったんじゃないかって……」

『死なねーよ。』

死んでも戻る、って言ったろ？

……蘭……ごめんな……』

私は、涙を手で拭った。

そっだよね、約束してたんだもんね。

『蘭……そんな、事件が片付いたから、帰れそうなんだ』

「えっ！本当っ!?!」

さっきの涙はどこへやら、自分でもおかしいくらい、笑顔満開。

『ああ……マジで』

「い、いつ帰ってくるの!？」

『…ん……一週間くらいしたらだな』

やっぱり信じてれば、願いは叶うんだ。

新一は生きてた。

帰って来てくれるって言ってた。

帰ってきたら、新一が変わっていてもいい。

私は新一を信じてる。

会ったら新一に言うんだ。

おかえり　　って。

「新一、待つてるから!」

…

それから新一が帰ってきて、一ヶ月とちよつと。

私の涙を止まらないうちに、新一は『好きだ』って言ってくれた。

今は幼なじみじゃなくて、恋人。ちよつと照れ臭いけど、私は今幸

せ。

放課後になった。

部活もない高校三年生だから、足早に学校を立ち去る。

「新一、帰ろうよ」

「ああ」

校門を出て、夕暮れの中を並んで歩く。

当たり前のような事が、当たり前にできる……これって本当の幸せなのかもしれない。

新一が消えてから、私はそう思えるようになったんだよ？

「そんでな、そんな時ホームズが……」

前のように、変わらず話す新一だけど、私は心の中でずっと願っている。

新一、もうどこかに行かないで……傍にいてね……

そう思い、隣を見つめると、新一が呟いた。

「灰原……？」

ちょうど河川敷の前。

胸のどこかで、またどこかに行ってしまう

そんな気がした。



**FILE : 8 幸福の訪れ（後書き）**

結構長くできました！

次回もよろしく願います！

FILE：9 灰原の姿（前書き）

前話と同調してます！

しばらく、あと2話くらいは続く予定なので、よろしくお願いしま  
す）#^・^#（

FILE：9 灰原の姿

放課後、蘭と一緒に帰っている俺。

今、俺たち恋人なんだよな ……

隣に居る大切な人は、俺だけの特別なものになった。

「そんでな、そんな時ホームズが……………」

いつものホームズ話に花を咲かせる。

俺は楽しくてたまらない。

しかし、蘭にとっちゃ面白くもなんともない話だ。それなのに笑って頷く蘭を見ると嬉しくなる。

…………… ありがとな

そんな気持ちと同時に、胸が痛む。

待たせていた理由も言わずに、蘭はコナンは俺だったとは知らないんだ。

純粹な蘭を見ると、いつも自分を反省させてしまう。

「そつか。ホームズってやっぱりすごいんだね」

夕暮れの河川敷の近くまで来た。川に夕陽が映ってきれいだ。

少し夕陽に見とれ、立ち止まったが、また歩き出す。

歩くと、向こうから人に交じって、小学生の大人っぽい女の子が歩いてきた。髪は：赤みがかかった茶髪。

「灰原……！」

あれは……灰原だ。

俺が元に戻ってから一度も会っていない。

心配してたんだ。

学校にも行っていないみたいだったから。

俺は何も考えず蘭を置き去りにして、灰原の元へと走った。

「灰原っ！」

灰原は驚いた顔をしている。

小学生と、元に戻った高校生の俺。変な組み合わせだ。

「……工藤君……どうしてここに……」

「学校の帰りだよ」

「そう……じゃあね」

俺が答えると灰原は足早に反対方向へ行こうとした。  
俺はその小学生の腕を掴んだ。

「おい、待てよ！」

「なによ？」

いつもの可愛くない不機嫌な顔を俺に向ける。

「お前……どうしたんだよ。何か変だぞ？」

……悩んでんなら俺に言えよ」

俺の後ろから蘭のかけてくる音が聞こえる。

灰原の目つきがますます悪くなっていく。しまいには顔をそっぽ向いた。

そんな身体でそんな事してもかわいいだけだったの……

「新一っ？」

息を切らした蘭が俺の隣に並んだ。お構いなしに俺は続ける。

「とにかく何でもいいから言えよ。俺だって、お前の事心配してんだからな……」

「新一……？」

あれ、この子哀ちゃんじゃない？」

わ…ヤベ…

蘭がいたんだった!

思いつきり本音喋ってたじゃねーかよ。

蘭は灰原の正体を知らないんだ。

灰原は蘭を見ずに背を向け、そのまま走って行った。

「おい、灰原!!」

俺は大声で呼び止めたが、振り向きはしなかった。

そのまま走る背中を見送った俺は、嫌な汗が体からどつと出てきた。

「……………蘭」

「新一……………哀ちゃんと知り合いだったの…?」

「え……………ああ、まあな。阿笠博士ん家で預かってる女の子だろ?」  
焦りが見え始めた俺。

「うん……………そうだけど……………知り合いだったんだ…」

蘭は疑っているような、寂しそうな瞳をしていた。

「蘭……………?」

FILE：9 灰原の姿（後書き）

今回は、灰原が河川敷に行くまで、走って逃げているところです！  
文章へタで気づいてもらえるかわかりませんが…（；；）

次回もよろしくお願いします。

FILE:10 揺らぐ心(前書き)

風邪ひきました(´・`・;)

熱出て、床に伏せてます。

気温の変化が激しくて…

暇なので小説書いて、更新しました！

一日に何度もすみません。

では、どうぞ！



FILE:10 揺らぐ心

服部君が帰って1日経った。

それから私は食欲も失せ、結局いつもと同じ、夜食抜きになった。

服部君の告白には本当に驚かされた。

恋愛に鈍いあの人が……あんなに素直に自分の想いをぶつけるなんてね。

元気づけようとして来てくれたみたいだけど、尚更元気がなくなってしまった。

自分が尚さら嫌いになった。

小学校の吉田さん、円谷君、小嶋君の手紙は嬉しかった。

私のことを考えてくれてるんだ、私のことを好きでいてくれるんだって。

後から見ただけど、封筒の中には写真が30枚くらい入っていた。それじゃ、膨れてしまうのも当たり前。

写真を見るのは辛かった。

コナンの時の彼の姿がたくさん写っていたから。私もその傍にいたのに。

手紙を読んでいると、罪悪感も覚えた。

コナン君がいなくなって淋しい

これは私のせいなのかもしれない。

私があんな薬作らなければ、彼は幼児化せずに済み、あの子とコナンの出会いもなく、苦しい想いもしなくてよかったのだろう。

それを言ったら、灰原哀だって存在しないのだけれど。

散歩しよう。

ネガティブ精神が身体を取り巻く。

当分は過ぎ去らないことは覚悟しているけど、少しでも和らげたい。

外に出ると空気が暖かい。

気持ちはまだ冷たい。

それからは足が動くがままに歩いた。

自分でもよくわからない。

何でここ歩いているのかも。

向かう先は河川敷。

お姉ちゃんとたまに会うと、よく行っていた。  
私が夕陽が好きだからって。

河川敷では、キャッチボールしている人がいる。  
川を夕陽が紅く染める。なんでこんなに哀しい色なの……

前に足を進めようとした時、進行方向には……工藤君と蘭さんがいた。  
並んで夕陽を眺めながら歩いている。どこから見てもお似合いの力ツプル。

私の足が震えだした。  
なんなの？

怖い……会いたくない。  
あんな二人、見たくはない。

私の呼吸が乱れてきた。  
逃げようと後ろを向こうにも向けない。

幸せそうな彼を見ると、胸に何か突き刺さる。

落ち着きなさい……志保。

自分に言い聞かせた。

向こうにいて、気づかないはずの彼がこちらに向かって走り出した。

「っ！」

「灰原っ！」

来ないでほしかった。息遣いの荒い彼。

「……工藤君……どうしてここに……」

「学校の帰りだよ」

「そう……じゃあね」

とにかく早く立ち去ろう。そう思い、後ろを振り向き帰ろうとした。けど私の腕を工藤君が掴んだ。

「おい、待てよ！」

早く消えたい……

そしていつもの刺のある言い方をする。彼を睨むような目で。本当はこんな顔したくない。

けど、私は可愛くなれないの……いつも。

「なによ？」

「お前……どうしたんだよ。何か変だぞ？」

……悩んでんなら俺に言えよ」

そんな気遣い、今はやめてほしい。

ただ、哀しいだけだから。

工藤君の力強い声は、私の心を揺さぶるから。

工藤君の後ろから蘭さんが走って来る。恋人を追いかける顔。

駄目……何も蘭さんは悪くないのに、睨んでしまつ。顔を逸らした。

「新一っ？」

同じく息を切らした蘭さんが工藤君の隣に並んだ。

工藤君は気にも止めず続けた。

「とにかく何でもいいから言えよ。俺だって、お前の事心配してんだからな……」

工藤君の声は少し掠れた。

自分が悪いのか、と反省するように。

彼は何も悪くない。

「新一……？」

あれ、この子哀ちゃんじゃない？」

蘭さんが不思議がる。工藤君と私が何故話しているのかって。

当然、蘭さんは私の正体を知らないから。

私は蘭さんを見ずに背を向けると、そのまま走って逃げた。

「おい、灰原……！」

工藤君の叫ぶ声が後ろから聞こえた。

二人とも、ごめんなさい……  
蘭さんもきつと疑っている。

弱い私は、二人とは会えない。

吐く息は加速していく。

でも、嬉しかった

彼が心配して服部君を呼んだのも、彼女の前で私に声をかけたのも

…

見えなくなるまで走ると、足が緩み、歩いてしまった。

後ろから来る怪しい陰にも気付かずに………

FILE:10 揺らぐ心(後書き)

小説書かせて頂いているうちに、哀ちゃんかわいそうになってきました……

作者の気まぐれで、方向が変わって、今までの予定のラストじゃなくなるかもしれないf^\_^、

FILE：11 知り合い以上？それ以上…？

「ねえ……蘭！蘭ってば！」

「……えっ！」

園子に名前を呼ばれて、ハッと我に返る。  
私またぼーっとしてたんだ……

「どうしたの、蘭。何かあったの？」

園子が私の顔を覗き込む。

凶星。

昨日の夕暮れの河川敷から、何だか気分が浮かない。

哀ちゃんと新一……なんでだろう……？

なんで知り合いなんだろう。

あの二人の周りの空気……深い関わり合いがある。きっと。

私と歩いていたのに、哀ちゃんを見つけたら一目散に走って行った。

哀ちゃんは小学生だよ……？

なのに、何で不安になってるんだろう。

哀ちゃんの所へ行っちゃいそうだって。

高校生の新一と小学生の哀ちゃんが、何かあるわけないよね。



せっかく頭を切り替えようとしたのに、また嫌なことが浮かんでくる。

『とにかく何でもいいから言えよ。俺だって、お前のこと心配してんだからな……』

近づいて行って聞こえた新一の言葉。

あれって……

あの意味って……

「ねえ……園子。哀ちゃんと新一って、何かあるのかな……」

園子に遠回しに聞いてみる。

「え、何。どうしたのよ、蘭」

園子は「何で、灰原哀ちゃんと新一君が話の中でコラボしてんの？」と私に不思議そうに言ってきた。

「あの二人って知り合いなんだ？」

「うん……そうみたい。私も知らなかったんだ」  
少しトーンが下がってしまう。

「そうなんだ。へえー、意外だね。……あの二人が知り合いでも、

何も関係ないでしょ。深い意味はないって」

「…うん」

そう応えたけど、まだ蟠りが残る。

本当にそうなのかな？

だって、それならあんな大人びた事小学生に言うかな？

俺だってお前の事、心配してんだからな

哀ちゃんは確かに、大人なオーラ出してるけど…。

「まあ、心配しなくて大丈夫だって！蘭と新一君との熱い絆の糸は誰にも解けないよ？」

熱いって……。園子は私を元気づけようとしてくれた。

「ほら、噂をすれば亭主が来たじゃん」

園子は笑い、指を差した。

指差す先には……。新一。

「なに話してんだよ？」

話に加わりたいたいとも言うように、新一はやって来た。

園子は急に立ち上がると威勢のいい声をした。

「ほら、もう下校の時間だよ！熱い夫婦は帰った、帰った！」

「園子…おめーなあ……………蘭帰るぞ？」

新一は呆れた顔をした後、私を誘う。  
いつもと何一つ変わらない、新一の顔を見て思った。

……そうだよね……

何かあるはずなんてない。

私ったら……哀ちゃんにまで不安の種を植えて。

本当にバカよね……

「うん、帰る！」

私は鞆を持ち、笑顔で言った。

けど、今の私は、そうやって自分自身を元気づけていただけなのか  
もしれない

FILE:11 知り合い以上？それ以上…？（後書き）

更新しました！

新哀の方は、今日も蘭ちゃんですみませんっ（：|：）

けどこの小説、恋愛的には最後は新一と蘭でハッピーエンドです。  
哀ちゃんも、ちゃんと自分なりにハッピーエンドに持っていきたい  
と思います！

次回からはそろそろ誘拐ネタを入れていきますので、よろしくお願  
いします（^-^）ノ

FILE : 12 突然の電話

蘭との帰り。昨日のように、綺麗な夕陽を見れたわけでもなく、あいにくの雨だ。

傘は2本、俺と蘭のどちらのもあったから、相合い傘にはなんなかった。

俺はさつきから蘭の様子を横目で伺っている。

何か、蘭が変だ……

無理してるってどうか……

その変化に気付きつつ、俺は一向に切り出さない。

もし勘違いだったら嫌だし、

勘違いじゃなくても、今の俺には、蘭の暗い理由のモトを取り除けない。

どうせ、灰原のことだろ……？

アイツのところに、蘭をほったらかして走って行った俺、アイツに大人びた本音を言っちゃまった、俺。

それが原因だ。

灰原の正体や俺達の過去を言えば、すぐに問題は解決。

ごめんな、蘭……

まだ言う訳には言かねーんだ。

アイツが…灰原が元に戻るまでは、元気を取り戻すまでは……。

灰原、アイツ……

本当に大丈夫なのか？

気付けば、俺が元の身体に戻って蘭と付き合いだした時からだ。

会いにいっても、拒否されるようになったのは。

最後に見た笑顔は、俺が高校生になって喜んでいる時 アイツ

は微笑んでた。

おっ、って思った。

笑ってるのは可愛い…

いつもあんなならいいんだけどな？

ルルル…

その時、携帯が鳴った。

阿笠博士からだ。

「…出ていいよ」蘭は言った。

「はい、もしもし」

『新一君かね？』

やっぱりこの声は博士だ。

ちよっと元気がない声だというのは、すぐにわかった。

「なんだよ、博士？」

『新一…哀君、今そこにおるか？』

ちよつど今、灰原を考えてた。

蘭のことを気にして、蘭から少し離れると小声で言った。

「いねーけど…：灰原がどうしたんだよ？」

『姿が見当たらんのかな…：昨日から…：…』

博士の言葉に硬直した。

灰原が…！？

「本当か、博士！？」

『ああ…：昨日、夕方に散歩に出たきり帰ってこんでな…：』

昨日の夕方？

俺と会ったあの時か…

あれから家に帰っていない…？

『哀君のことじゃから、大丈夫だとは思うがの……。心当たりある所を新一も探してみてはくれんか？』

携帯を通して聞く博士の声は掠れている。

俺は気にしつつも言った。

「探すのはいいんだけどよ。なあ…博士……いや、なんでもねーよ……」

『？……そうか…頼んだぞ、新一』

博士がそう言った後に、ツーツーという機械音が聞こえた。

さっき俺は言葉を飲み込んだ。

博士の心に負担がかかる気がして、言えなかった。

…誘拐かもしれない…

…なんてな……



FILE:12 突然の電話(後書き)

哀ちゃんまだ、出て来ませんね……f^|^  
次の次には出す予定です！

感想も評価もお待ちしてます(#^.^#)  
次回もよろしく願います！

FILE:13 蘭には関係ない(前書き)

本日2話目の投稿です！短いですが…；

次の更新は土日になりますので、よろしく願います！

FILE:13 蘭には関係ない

携帯をパタンとしまつと、俺は蘭を見た。

「なあ、蘭……先帰っててくんねーか？」

気まずそうに、俺なりに気を遣いながら蘭に言った。

とりあえず灰原を捜さねーと。

俺はいつものように、引き受けてくれるかと思った…のに、

「嫌だよ!」

蘭が口にした言葉は意外だった。強気な口調で、戸惑ってしまう。

「ら、蘭……?」

「新一……今の何か重要なことでしょ?悪い方の……」

当たってやがる……

いつも何か感じ取る蘭の勘はすごい。

「新一……哀ちゃんの事だよな?今の電話」

蘭の疑視した瞳。

俺は目を逸らしたくなった。直接接触してはいないものの、.. 真実を

話してほしい”そんな想いが伝わってきた。  
それでもしらばっくれる。

「…蘭には関係ねーよ」

俺が強く言った次の瞬間、  
蘭の目から涙が零れた。きれいな涙だった。

「関係ないって何…？」  
蘭は涙声で、震えている。

「私、新一の彼女だよ…？  
新一のことが好きだよ…？  
なのに、何で隠し事するの!？」

涙でぐちゃぐちゃの顔をしながら俺を怒った。

「……………」

「新一…話して、ちゃんと…  
哀ちゃんとは、どんな関係なの…？」

遂に聞かれた

なあ、灰原……

言ってもいいのか？

お前のこと……

蘭には話していいよな？

言ってもいいのか…？

俺は頭の中で灰原に声をかけた。……当の本人は何処にいるのかわからねーけど。

灰原が元に戻るまで、言わねーって決めたのは俺自身。

けどな、さっきから前で泣いてる蘭を見てると…決心が揺らぐ。

蘭の涙を見たら、鍵をかけてた、言わなくてはならないモノが溢れ出そうになる。

昔から弱い、蘭の涙。

「…新一…？」

俺が沈黙していると、蘭の涙も乾いてきて、首を傾げ俺を見てくる。雨の音に掻き消されそうな声。

俺はハツとし、切り出そうとした。

「…あのな、蘭」

ルルル…

携帯がまた鳴った。

同じボリウムなのに、さっきと違いけたたましい感じがした。

言おうとしていた時に挟まれて、俺はちょっと安心してる。

「ごめん、出るな？」

携帯を開くと、…非通知…の文字。

嫌な予感が頭をよぎった。鼓動が速く胸を打つ。

「もしもし」

『…工藤新一だな？』

低い男の声だった。

機械で多少ながら、声を変えているが、男なのは確かだ。

俺はとつさに、録音ボタンを押した。

「何の用だ」  
警戒しながら俺は言った。  
すると相手はフツと笑い、

『灰原哀は誘拐した。いや……宮野志保だったな？』

「お前!!」

『一時間後に杯戸町の3番地の廃ビルにお前一人で来い。  
行つとくが、警察にでもバラしや、ただじゃおかねえぞ。』

女が大事なら、来るんだな』

ツーツー

電話が…切れた。

「……灰原」



呼吸が苦しくなってくる。

誘拐したって…言ってたな…

俺の思ってた通りだった。

当たらなければいいと、ずっと思ってた。

今から杯戸町の廃ビルを調べて、乗り込む

もう、俺の体は本能で動いていたんだと思う。

考えなきゃいけねえことも、蘭も置き去りにして、走って行ってしまった。

ごめん、蘭

その時は…灰原を助けたい…その一心だったんだ。

FILE:14 言つへきこと(後書き)

新一 side 続きますね f ^ | ^ ;

次回は哀ちゃん久しぶりに登場です!

新一の哀ちゃんへの思わせぶりな態度と、哀ちゃんの正体をなぜ誘拐犯は知っていたのか…

おいおいわかるので、よろしく願います。  
駄文ですみません…

FILE : 15 廃ビルの中で

ピッ

私を誘拐した犯人は、携帯の電源を切った。  
今かけていた電話の相手は、工藤新一。

私を一人で助けに来いと脅してたようだ。

「ここで大人しくしてろ」

低い声でそう唸った誘拐犯は、私を置き去りにして部屋を出て行った。

下りる度に鳴る、階段のカンカンという音を耳で聞いて、下へ行ったのを確認する。

もつとも、こんなところ“部屋”なんて言えるのかわからない。

廃ビルのようなところの、小さな個室の中に私はいる。

中は何もなくて殺風景。

一つしかない窓には鉄格子がはめられている。

口にはガムテープ、手は紐で結ばれていて、

立ってその小さな窓から外の様子を伺うのがやっと。

外を見ても、人通りも建物もなく、とても助けを呼べる状況じゃない。

そんな所に私はいる。

もちろん好きでいるわけではない。昨日、工藤君と河川敷で会って、走って帰る途中に車に押し込められたのだから。

工藤君……助けになんて来ないで。

なぜ私の正体を知っていたのか、なぜ工藤君を呼んだのか。

これは金目当ての犯行じゃない。

犯人は拳銃を持ち、顔も隠していなかった。

きっと私を殺す気なんだわ。

彼が来ようと、来まいと。

そして、彼も来たら最期……殺されてしまう。

私一人で死ねばいいから。

これは罰なのだから。

私の今までの罪を拭うことなんてできない。

私が研究してきた薬で一体何人の人が死んだんだろう。

工藤君と蘭さんの邪魔もしたくない。  
あの二人はあんなに想い合っているのに……私みたいな人がいるから、割れ目が生じ始めてる。

もう、私なんて……死んでもいいのよ。

……

長い間ここにいて、誘拐犯の正体に私は気づき始めた。  
きっと組織に怨みを持つ者……特に私。

APT X 4 8 6 9 が絡んでる。

あんな薬、作るんじゃない。

あの薬で幸せになった人は誰もいない。そんな薬じゃないもの。

彼が解毒剤を飲んだ後、私は彼に謝った。

『あんな薬作って、貴方を幼児化させて、本当にごめんなさい』

彼は笑って言った。『俺、あの薬飲んで良かったと思ってんだ』

私は“え？”と驚いた顔をした。

『周りのヤツらの大切さに気付けた。俺はみんなに支えられて生き

てたんだな、って。もちろん蘭のことも。  
…それと、オメーだ』

工藤君は私に目を向ける。私の好きな目だった。

『灰原みてえなヤツがいんだな、ってことだ。あんな大きな組織があつて、そんな中で地獄のような生活をして、薬を作っていたヤツがいる。俺、今まで知らなかった。』

灰原、ごめんな。最初に会った日の夜、お前のこと殺人者呼ばわりして…』

最後の言葉は、思ってもみなかったけど、とても嬉しかった。

彼の言葉はいつも私の中心を回るから。

いつからこんなに好きになつていたのかしら ?

来なくてもいい

私は死の覚悟を決めている。

FILE:15 魔ビルの中で(後書き)

長めでした！

というか、他の連載が滞ってます)。。(；)

マイペースに頑張りたいと思います！

話のテンポが早いとか、わからないところがある場合は、ご指摘  
ください。

確認はしてますが、まだまだ下手なので…

次回もよろしくお願いします！

FILE：16 博士、すまない

俺は走った。蘭を残して。

そのまま突っ走り、しばらくして杯戸町の駅まで来た。ここまでの体力を褒めたたえたかった。

いつの間にか雨も止んでいる。俺は何もささずここまで来ていたら、体中がびしょ濡れだ。

俺は人の行き交う中、一人、電話をかけた。

「……博士か？」

『……なんじゃ、新一か？』

電話の相手、阿笠博士の沈んだ声が聞こえた。そしてすぐ、

『哀君が見つかったのかね！？』

爆発しそうな大きな声が飛んできた。相当不安なんだな……博士も。

「あ……いや……まあ……」

歯切れの悪い言葉が並ぶ。嘘をついてしまった。



そんな時、素直に“見つかってない”などと言えなかった。博士の娘のような存在の灰原が、誘拐されたなんて知ったら…

しかも、ただの誘拐ではない。

灰原の正体を知り、何か怨みがある奴の仕業。

アイツに怨みがある奴は多そうだけどな。

俺一人だけで行く。

その要求が、アイツと俺の関係も知っていることを裏付けている。

警察には言えねえ…

灰原が殺さちまうかもしれない。

俺ももちろん、灰原の正体がバレちまうかもしれねーから。

『新一？』

「…ああ、とにかく灰原は俺と一緒にいつから心配すんな。

それより、博士。杯戸町の3番地にある、廃ビルを調べてくんねーか？」

『哀君と一緒にかね…よかった。ひとまず安心じゃ。』

それはいいが、何で廃ビルなんか調べるんじゃ？」

博士が穏やかな口調になった。ホツとしたのもつかの間、当たり前  
の質問をぶつけられる。

「いつ、今抱えてる事件に関係あんだよ！それじゃ、頼んだぞ！…

…」

早口になってしまい、焦った俺はそのまま通話をやめた。

「はぁ…」

ため息が漏れ、駅の柱によっかかる。

胸に残る罪悪感。

博士には言つといたほうが、よかったのかもしれない。  
もしかしたら…二度と…

博士も蘭も灰原も…

みんなして俺を悩ませる。

俺の身体は一つしかねーんだから。そんな支えきれない。

灰原…無事でいてくれ…

俺は博士の電話を待ちながら、ひたすらそう願うばかりだった。

さつきから、後ろをつけてくる陰を、

知らないふりをしながらも、俺は横目でチラリと見た。

FILE:16 博士、すまない(後書き)

駄文で気づいてもらえないかもしれませんが、一応雨も降っていたし、緊迫してる感じですよ。

毎日更新できて嬉しいです！

ついに16話までできました！

今までの連載小説の中で長いです。私今まで短かったの…

次回もよろしくお願いします( < | > )

テスト近いので、勉強しなきゃですね…笑

## FILE：17 後ろの追跡者

「ありがとな、博士」

そう言つて電話を切った。

たつた今、頼み事の返事が来た。

俺はそれを聞き、驚いた。

杯戸町3番地の廃ビルには、意外な過去があつたのだ。

廃ビルは以前、印刷会社が使用していたらしい。しかし、今はその印刷会社も一年前に潰れたらしく、薄汚い廃ビルと化している。

そこまでは普通なのだが、印刷会社もただの潰れ方ではないようだ。

一年前の9月10日。会社で残業していた男性の小林晴夫さんが、銃殺された。翌日の11日に出勤してきた同僚が見つけたらしい。

完全なる他殺のようだが、社内に指紋などの手がかりになるものは残されていない。小林さんは人柄も良く、仕事に熱心で怨みを持つような人はいなかつたという。

捜査は打ち切られた。

そしてまたその翌日に、家で同じく銃殺されている、その印刷会社の社長が見つかった。

社長には子供も養子もおらず、そのまま会社は潰れてしまった。

その事件のせいでビルを使用する人もいなく、近所の人からは幽霊

の出る廃ビルとして、疎まれているらしい。

それが廃ビルに隠されていた過去だ。

それだけでは前に殺人現場になった場所ではない。

けどな…なんか引つかかんだよな？

探偵の勘？事件の時のあの感じがする。

時間は刻々と迫る。

約束の時間まで、あと30分。

そろそろ行くしかねえな……まず、後ろの俺を追跡してくる奴の正体を暴いてから。

誰なんだ？

さっきから俺を付けてくるのは。気配に気づいたのは、杯戸町の駅から。立ち止まるなり、視線を感じた。

付けるのは、あまり上手くはない奴らしい……バレバレの尾行だ。少なくとも怪しい奴ではないようで一安心だが…

仕方ねえ

俺はしばらく歩き、曲がり角の死角で、瞬時に物陰に隠れた。

近づいてくる足音は、人を見失った時の不安の音がする。

こんなときにまで、俺は子供なんだな？好奇心がうずいてしまっ。  
近付いてきた奴は……

「蘭!？」

蘭だった。

俺を尾行してたのは蘭だった。

「し、新一っ!?!」

蘭は目を見開いき、ビックリしたようで一步下がった。  
ビックリしてんのは俺だっつーの。

「何でいんだよ……」

呆れてしまった。

さっき俺は蘭を残してきたはずなのに。

「何でいんだよ……じゃないよ!」

電話のあとの新一の顔を見れば、何かあったことくらいわかる!?!  
心配して来たの!?!」

蘭の怒鳴り声は大きくて、耳を塞いだ。  
これからビルに乗り込むってのに。

「…蘭、帰れ」

冷たく言い放った。

「嫌だよ!!」

「いいから、帰れ」

「イヤ!!」

「いいから聞け!!」

“嫌”の一点張りの蘭に叫んだ。蘭は強気の顔から、戸惑いの表情に変わっていく。

ちよっと強く言い過ぎたかもしれない。

けど、蘭のためなんだ……

「今から行く所は危ねーんだ……蘭は来ちゃいけねえんだよ……」

そっだよ……

俺は今から死ぬような危ない所に行く。

俺は死ぬなんてこれっぽっちも考えてない。

灰原の未来も俺の未来も、絶対に守ってみせる。

けどな、蘭にはそんな場所に連れて行きたくない。犯人は、銃を所持しているのだから。

「新一………だったら尚さら行く!!」

「え？」

「新一…私、新一の助けになりたいの！役に立ちたいの！」

蘭の目は真剣だった。

もじ……

言じっきゃねえか……



**FILE:17 後ろの追跡者(後書き)**

本日2度目の投稿です！

字ズラズラでしたね f ^ | ^ ;

評価&感想もよろしくです！

次回もよろしくお願いします。

FILE:18 ウソつきの真実(前書き)

新一、ついに告白です！

FILE:18 ウソつきの真実

もう…言うつきやねーか…  
俺は決心した。

俺たちの…過去…  
それを聞けば蘭だって諦めるよな？  
俺は蘭が大事だから…危険なめにはあわせたくない。

だから、言うよ。  
真実を…

蘭side

「なあ…蘭」  
新一の唇が静かに動いた。表情が曇っている。

何故か私の体温まで下がっていく。さっきまでの威勢のよさはどこへやら。

深刻なことを話されるんだね、私。  
長い付き合いだもん。新一が考えてることくらい、すぐにわかるよ…？

けど、新一のこれから話す事は、私の頭じゃ計りきれないくらいの

ことだった…

「俺な……今までずっとオメーの傍にいたんだよ」

「？」新一の口から意味のわからない言葉が出てきて、首を傾げた。何を言ってるんだろう……つい最近、戻って来たばかりじゃない。

「江戸川コナン あの少年は、この世には存在しないんだ。  
…あの少年は、俺自身なんだよ……」

「え……」

上手く喋れない。

頭が真っ白って、多分このこと。

「コナン君が新一なはずじゃない……！私、今まで新一とコナン君が一緒にいるところとか、いろいろ見てきんだから……」

「トリックだよ……全ては。」

蘭…俺とトロピカルランドに行った日のこと覚えてるか？」

その日を忘れたことなんて、一度もないよ。

あの日から新一がいなくなっただもん。

あの日は、あれから大っ嫌いだった。

「あの日…俺は黒ずくめの男達に会い、薬を飲まされた。気がついたら身体は縮んでいた。」

俺はその日蘭と会い、おっちゃんの家なら何か情報が入るんじゃないかって、転がり込んだ」

そっか…それなら、いろいろと辻褃も合うもんね。

コナン君が来た日、お父さんの事件の解決　　ぴったり合うもんね。

本当、オメーには辛い思いをさせちまったな…  
と、新一は寂しそうな笑みを浮かべた。  
そんな顔をしないで……？

「蘭は灰原とオレの関係を気にしてるよな？  
…灰原はオレを小さくした薬を作った張本人なんだよ……  
灰原も元は組織の人間だった」

哀ちゃんが…？

あの哀ちゃんが…組織？

新一の言う、大きい組織の仲間だったの？

「灰原も薬を服用し、小さくなってしまったんだ。」

俺はアイツと小さくなった日々を闘ってた……。

そして数ヶ月前、やっとその組織を倒すことができたんだ。…死傷者も大勢出た…

蘭　　今から行くのは、灰原のどこなんだよ」

驚いすぎて、頭が回らない。

今までの考え方が全て逆転されたんだもん…

最後の文章だけきにくわなかったけど、何か理由がありそうだから黙っておいた。

「灰原が誘拐されたんだ……俺は今からその場所に行く。

蘭は来るな……死ぬかもしれないねーんだ」

誘拐っ!?

びっくりしたのと同時に、私の中のダメな気持ちが込み上げてくる。

今は言っちゃだめだよ……

こんな、わがまま。

「新一は……?」

新一はその、死ぬかもしれない場所に行くの……!?何で!?!」

口から出てた、信じられない言葉。  
人の命を救うのに訳なんていらぬ。新一が言った。  
ましてや新一なら、自分が危険でも、それでも行く。

これは哀ちゃんへの嫉妬の表れ。

私には言わなかつた秘密も、哀ちゃんには話してた…？

そう思つたら悔しくて。

「蘭　俺は、蘭が好きだから」

「えっ…」

新一の口から出たモノに耳を疑つた。

新一がそんなこと簡単に口にはしない。だから、顔が真っ赤になつていった。

「けどな、蘭……」

アイツも大事なんだ。

小さくなつてた時、オレを支えたのはアイツだから　守つてや  
るって約束しちまつたんだ。

いつも内情を表に出さないで、本当は自分が一番つらいくせにな？」

新一の瞳は懐かしむような感じで　　そう、私の知らない過去。  
新一はそれを話している。

哀ちゃんの話をしている時、どこか楽しそうだった。

「オレ思ってたんだ……いつも俺がアイツに助けられてたんだってよ  
……  
今度は、俺が助ける番だから」

もう……わかったよ。  
私の踏み込める領域じゃないんだね……？

「新一、生きて帰ってきてね………？信じてるから」

目から不思議と涙が零れる。涙もろいの、いいかげん直さないかね？

新一は「ああ……」とほほ笑むと、私の涙を手で拭ってくれた。

そして走って行ってしまった。

ここ数日間、この背中を何度見たらろう……？

河川敷、雨の帰り道　　……



大嫌いなあの日、あの嫌な予感がまた私を襲う。

本当に…約束だよ………？

生きて、無事に帰って来てね？

信じてれば、帰ってきてくれるよね？

FILE:18 ウソつきの真実(後書き)

わーっ!( < | > )

ついに言っちゃいました。

なんか、作者まで盛り上がってます。笑

評価ありがとうございます!

また感想、評価をよろしければお願いします。とても励みになります(#^・^#)

次回もよろしくお願いします!

FILE：19 向けられた銃（前書き）

犯人の話ズラズラ…です（^^…）

作者の小さい脳みそで、懸命に考えました。

読んでやってください！

それでは、どうぞ。

FILE：19 向けられた銃

あと、20m…

廃ビルまでの距離は、あと20mしかない。

今から乗り込み、灰原を助ける。

蘭の涙　　また見ちまった。

アイツを泣かせることは、もうしないと決めたはずなのに。

『新一、生きて帰ってきてね……………？信じてるから』

頭の中で蘭の言葉が蘇る。

ホントに…泣き虫だよな、蘭は……

お人よしだから、人の気持ちを察するとどこでも泣いちゃう。

ああ、生きて帰るから。

ぜってえ帰るから。

「よし……」

灰原、待つてる。  
今から助けに行くから。

張り詰めた空気を感じながら、ビルの中へと向かう。  
入り口の傍で、気づかれないようにこっそりと中を覗いてみる。

うわ…ホントに殺風景な所だな……………  
何も置いていなく、床のタイルがよけい引き立たせている。中の壁  
には染みなどがついていてる。

ガラスのドアをギィ…と開け、中に入った。

辺りを見回していると、人の足音がし、俺は身構えた。  
その足音の主が現れた……………

「は、灰原!!」

薄暗いビルの中から、灰原の姿が確かに見えた。

幻覚ではないようだ。

男が銃を突き付け、縛った灰原を押しながらやってきたのだ。

早く近づきたい。

ガムテープが口に張られていた灰原の顔は、恐怖の色を感じさせなかった。

そんな灰原に寂しくなる。

もつと恐れがれよ？

やせ我慢すんじゃないよ。

男は顔面を覆ってもいなく、顔がはっきりと見えた。人相は人柄の良さそうな感じがした。

俺はその犯人を睨む。

「……お前だな？灰原を誘拐したのは」

男は冷たい表情でフツと笑った。

「ああ、そうさ。

私が灰原哀…いや、宮野志保を誘拐した犯人さ」

すると男は灰原のガムテープを取り、灰原の頭に拳銃を向けた。

「工藤君っ！！なんで来たのっ……」

灰原は悲痛な声をあげた。そして犯人を見た。

「あなた……何で工藤君まで……どうせ私に怨みがあるんでしょっ！？」

それなら私だけにしなさいよっ！！この人は関係ないの」

「そう、私はお前に怨みがあるんだよ……灰原哀」

「それって、何なんだ……？」

俺は言った。

男の目つきが変わる。

「私には息子がいた。小林晴夫という、息子が……その顔、お前は知っているようだな？工藤新一」

「え？……」

俺の顔色を、犯人は見逃さなかった。

小林晴夫……この名前は……さっき電話で……

「…このビルで働いていた、私の息子だ。気立てがよく、働き者で、みんなから好かれていた。」

そんな息子がある日突然、殺された。射殺だった。

それを電話で聞き、私は耳を疑ったよ。

事件の手がかり特に無く、警察の捜査はそこで打ち切られた。

しばらくして、私が息子の遺品を整理していた時に出てきたんだ…  
タンスから。

息子が調べていた組織の調査書が……。その組織が行っていること  
など、ぎっしりだった。見ているこっちが恐ろしかったよ…

それを見て直感した。息子はあの組織に殺されたんだとね」

組織……多分、黒ずくめの奴らのことだ。

「数ヶ月後、ニユースでその大きな組織が潰れたことを知った時は、  
天にもものぼる気持ちだった。これで仇をとれた……と。」

しかし、解剖を担当した人がこっそり教えてくれた。あれは毒殺だ、  
と。公表にはされなかったが。

銃殺はカモフラージュ……。私はすぐに調査書を見に行ったよ。あの  
中に気になる記事を見つけたのを思い出して……。

思った通り。調査書には組織が毒薬を開発していることがわかった。  
そしてその考案者が……宮野志保、お前だった」



灰原の頬に汗が滑った。灰原は微笑すると言った。

「A P T X 4 8 6 9 …」

「ああ、その薬だ。…しかし、当の宮野志保は捕まってはいない、行方不明だというじゃないか。

私には復讐の炎が燃えたぎっていた。早く宮野志保を捕まえて殺してやりたい、とね。

私は高校生探偵、工藤新一と接触をはかった。もう自分ではどうしようもなかったから。

彼の家に行った時、資料にあった写真の女と瓜二つの小学生を見つけ、寒気がしたよ」

なんだ、この男は……

どこまで情報を掴んでいるんだ…？

この男の情報元の調査書を作った小林晴夫さんは、組織の手に落ちたとみてまず間違いない。

組織を知りすぎたんだ。

知られたら、その可能性が消えるまで殺す。  
それが奴らのやり方だった。

「私は確信した。宮野志保は身体が縮み、灰原哀として生活をして  
いる、と」

「でも…それでも…」灰原が呟いた。

「私が薬を作っていたこと、組織にいたこと、幼児化したこと……  
別に隠すつもりはないわ。」

私のせいで死んだ人がいるのも知ってる……。ごめんなさい。

……こんなことで許してもらえとは思っていないわ」

アイツの言ったことは素直な気持ちだったと思う。

俺は犯人ばかり責めることはできなかった。  
けれど、灰原の心情もわかるんだ。

作りたくもない薬を作らされて。  
ずっと罪という十字架を背負ってきたんだ。

「…私のことはどうなってもかまわないから。この人だけは…助け  
てっ……」

俺はびつくりした。

灰原の目から涙が流れているのに気づいて。

オメーの涙を見たのは、あの時以来だな。

大学教授の事件　お姉ちゃんをどうして助けてくれなかったの？

涙ながらに語る灰原に、俺は胸が痛んだ。

初めて見た素顔。俺の灰原への疑いは、あの時に晴れた。

そんな涙に、犯人は唇を噛み締めた。手は震え、目は憎しみで、冷酷に見えた。

次の瞬間男は怒鳴った。

「お前に…おまえに…：…なにがわかる！！！！…息子を殺された父親の気持ちか！！！」

ハ―ハ―と男は息を取り乱した。

「死んだんだ…息子が死んですぐ…：…妻もな。

私が工藤新一を呼び出したのには訳がある。」

「俺を呼んだワケ…：？」

「この女を殺すだけでは、まだまだ足りないと思ったからな？」

男の声に熱がこもる。

俺のバックにある夕陽は、さっきより赤みを増して、男の顔がより正確に見えるようになった。

「この女の前で、この女の大事な物を消してしまえばいいんだよ

「..」

「っ!..!」

.....銃口は俺に向けられた。

FILE：19 向けられた銃（後書き）

この小説、ダークですね。笑

あいかわらず、緊迫した状況が上手く書けません；

次回もよろしく願います。

銃口は俺に向けられた。

フツと俺は笑った。

組織と戦ったあの日を思い出したから。

ジンと姿が重なる。

そんな俺に、気分を害した犯人が眉間にしわを寄せた。

バンッ

銃声。男が発砲した弾は、俺の頬を掠めた。  
頬は切れて、血がツーと流れる。

「工藤君っ!!」

俺は死ぬのかもしれない  
そう思った。

「おい、灰原ツ！！来るな！！来るんじゃねえ！！」

灰原がこっちに向かって走って来る。

「！？」犯人は灰原の後ろ姿に向かって発砲した。

バンツ

弾が当たり、灰原の手や身体を縛っていた縄が切れた。

悲痛な銃声は何発も聞こえ、灰原の身体に当たっていく。

「灰原ツ！！」

俺が近づくと、小さな身体は俺の胸にもたれかかった。

「……く……どっ……く……ん……」

今にも縊じそうな目で、俺の名前を呼んだ。

「は……灰原……」

俺の身体にはたくさんの血がついた。

…灰原のものだった。

4、5ヶ所撃たれ、体中血だらけ。意識が飛びそうだ。

俺の中のなにかが壊れた。

怒りや憎しみが燃えてくる。

俺はおもむろに、手首に付けていた時計型麻酔針を構えた。

「ハー…ハーッ」

相手は興奮しているようで、俺の行動をよく見ていない。

パシユッ

針の飛び出した音とともに、

ダンッ

と男の倒れる音がした。

眠ったか

俺は確認すると、腕の中でぐったりとしている灰原を揺すった。

「…おい、灰原っ……」



返事がない。

「おい！灰原ッ……！！」

「……くどう……く……ん」

「……灰原……」

片目を開けた灰原を見て、ふう……と息を吐いた。  
ひとまず安心だ。

「待ってる。今、救急車呼ぶから……」

俺が懐から携帯を取り出そうとした時、灰原が言った。

「よかった……」

「……は……？」

「……あなたが……生きてて」

それを聞いて、灰原に言った。

「オメーなんであんなことっ……………」

「…え…？」

「俺が撃たれた時、何で来たんだよ　お前、運悪かったら死んでたぞ…」

…もうダメだ。

灰原を安静にしておかねーと、出血多量と傷口が広がって死んじまう。

そんな答えを聞いている場合じゃねーよな。

「灰原、いいから安静にしてろ……………今から救急車と警察呼ぶ…」

俺が言いかけてやめたのは、

灰原はフツと笑って、傷を抱えながら、おきあがったからだ。

目を細めながら、俺の頬を手で触る。

「はい…ばら…？」

俺が不思議そうに口を開いた瞬間……………唇が重なった。

温かい感触は、紛れも無い、灰原のものだった。

俺の意識が硬直して、なにがなんだかわからない。

FILE:20 キス(後書き)

チューしちゃいました( # ^ . ^ # )  
いつ書いても恥ずかしい…

次回もよろしく願いしますっ！

FILE：21 好きな

灰原の顔が近づいた時は、自分でも意味わかんねえくらいに、ドキドキしてた。

「…灰原…」

やっと離れた唇には、まだ熱がこもったまま。

呆気に取られながら、俺の心臓はバクバク波打ったまま。止まることを知らないように。

「…ごめん…な…さい」

「お前…なんで………」

“なんでキスなんかしたんだ”  
意識した俺は、その言葉を飲み込んだ。

灰原は寂しく微笑んだ。

「バカ…ね………」

心ん中を見透かされていたんだろうな。

時が止まる、ってこのことなのかもしれない。  
この時ほど、こう思ったことはなかった。

「好きなの、あなたのことが」

「えっ…!?!」俺の目は見開いた。

どうせ冗談なんだろう?……オメーに限って、んな事あるわけねーも  
んな…?」

灰原が俺の顔を見た。

「本当に鈍感ね…」

鈍感?オレが?

「私はあなたが好きだった……ずっと……困らせてしまう……かも  
しれないって……思ってた……」

灰原は、段々と苦しくなってきたようで、ときれときれ俺に言った。

「けど……言う……わ……死ぬかも……しれないから……」

「縁起でもねーこと言うんじゃないよ！」

「……わたしを……わたしを生かしてくれていたのは、工藤君だから  
……」

あなたがいなかったら、わたし……死んでいたわ……」

そんなことない。

そんなことあるわけない。

オメーは今まで、そんな想いだっただのかよ……？

いつからだ？灰原の中で、俺の存在が大きくなっていったのは……。

冗談じゃねーよ。

何で、もう死ぬみたいな言い方してんだよ。

「あ……」

灰原が不意に、今まで見たことのないような、可愛い顔で笑った。不意すぎて、俺は胸のどこかでキュンとしてしまった。

「わたし……今、お姫様よね……？」

「え……」

「今まで……か弱い面なんて……見せてこなかった。けど……私だって……わたしだって……いつもあなたの隣にいれる存在になりたかった……守られていたかった……」

お姫様になりたかったっ……」

は、灰原……。

「だ……けど……今のは……忘れ……て……」



遠くでサイレンの音がした。救急車の音だった。それと同時に、苦しそうに少しずつ喋っていた、灰原の口が動かなくなつた。

「灰原あッ!！」

俺が叫んだ時には、蘭や救急隊員、警察がこちらにやって来ていた。

死ぬなよ…灰原……

タンカーに乗せられた灰原を見つめながら、俺は思った。

FILE:21 好きなの(後書き)

だいたい毎日更新してましたのでf^|^|^、約一ヶ月で最終回を迎えそうです(笑)

新一の哀ちゃんへの思わせぶりな態度……。時々、新蘭じゃないの!??ってなりますよね( ; )  
新哀も入れていかないと、話上困るので…  
哀ちゃんの幸せ、すごい願ってる作者です。

次回もよろしくお願いしますっ!

FILE:22 白い世界

あれ、私……  
ここ……どこ……？

空気のように身体が軽い。

ああ……これが“死後の世界”っていうもののなの。

周りの世界がただ真っ白で、何もなくて、ぽつんと一人だけの私。

わたしの心の中を写し書きにしたくらい似ている。この世界は。

確かわたし……

誘拐されて、拳銃で撃たれて……？

あの時、工藤君を撃たれて、もう何がなんでも彼だけは  
と前  
に飛び出した……？

そして、工藤君に『好き』って言った。  
この記憶だけは、明白だった。

振られる。

迷惑をかける。

彼を悩ませる……

そんなことわかったた。

けど、抑えられなかった。

最期のさいごに、今まで溜め込んでいたものが、急に溢れ出した。

もう死ぬんだと思うと、人間ってどんなことにも素直になれるのね。

そして、キスマでした。

最悪ね、私。

好きでもない相手にされて、工藤君だってどんなに困ったことか

彼は助けに来てくれて、

わたしの名前を必死に呼んでくれて。

彼の顔を両手で触ってみたら、  
本当にわたしの気持ちなんて気づいてないのね……

そう思うと、無性に哀しかった。

……最期くらい。

たじたじな彼の口に…私は唇を重ねた。

そして、告白

もう100%嫌われているのなら、このまま目を覚まさなくていい。  
伝えたいことも伝えた。

今度こそわたしの居場所が消えたの。

夢や希望もないわたしは、どうやって生きてゆけばいいの…？

もういいの。

今までみんなありがとう。

この真っ白な世界の中で、眠りにつこう　　そうした時。

遠くで声が聞こえた。

聞いたことのある声。わたしの好きな声。

「お……い」

何を言っているの？

え……？

聞こえないわよ……

発信源がどこかもわからない。

この空間の全部から声が聞こえてくるみたい。

「……は……い……は」

何を言っているかはよくわからないけど、

私はこの声が大好きなことだけはわかった。

もっと近づきたい……

もっと聞きたい……

そう思った時、白の世界が黒く染まった。

さっきとは違う、真っ黒な世界。闇　　？

遠くで鬱すら光の漏れていて、その光に向かってわたしは走った。

光にたどり着いた時、私の瞼が開きはじめた。

鮮明になってゆく景色。

「……灰原！」

私の顔を覗きこみながら、明るい笑顔を見せたのは、工藤君だった。

「……く……どつ……くん……」

掠れ声でわたしは言った。その言葉に、工藤君はふう……と息を吐いた。

「よかった……」

…心配してくれてたの……？

見れば私の手は、彼の手にぎゅっと握られている。

目の下には隈。

「ここは…？」

「ああ、杯戸町の病院だよ。オメー、あのあと運ばれて、意識不明の重体。あれから3日も寝てたんだぜ？」

「そう……」

「今、医者連れて来るから。待ってるよ」

「ええ……」

私がそう返すと、彼は「じゃあな」と言っ  
て病室を出て言った。



待ちたくなくても、待たなきゃいけないでしょ。

撃たれた部位が痛んで、少し動かしただけで顔が歪む。

心電図が斜めに置いてあり、そこから伸びるコードがわたしの身体を覆っている。

…点滴に酸素マスクまで口に付けられて。

こんな状態でどこに行くことが無理に近い。  
待ちたくないけれど、待たなければいけない理由がもう一つ

“告白の返事”

彼は必ず答えを導き出すでしょうね。

推理のようにはっきりさせたいタイプだから、  
中途半端なことはしない人だから。

そして、また意識が遠くなりはじめた。  
周りの景色がぼやけて、視界が狭くなってゆく。

今度はただの“眠り”。  
体力が限界までできていたのか、眠気に負けていく。

私はもう大丈夫だから。  
だから工藤君も早く休みなさい……

ずっと傍にいてくれたであろう証拠  
工藤君の目の下の隈を思  
い出して、そう思った。

FILE:22 白い世界(後書き)

書き溜めておいたのを、試行錯誤の上、なんとか投稿できました！  
ところで、みなさんの理想の新一はどんなものでしょうか (<|>)  
？

私は、原作のまんまで、  
好奇心があつて、スーツが似合つて、推理力があつて、優しくて、  
カッコつけで…？

キリが無いので、ここで終了です。笑

私は毎日投稿していますが、いつまで続くのだろう…毎日投稿。時  
々わからなくなります。

趣味なのでまだまだいけますけど… f ^ | ^ ;

それでは、次回もよろしくお願いします。

FILE：23 戻りし灰原

「えっ！？灰原哀さんが目を覚ました！？」

驚いた医師の顔に、ぱっと花が咲く。

病室で目をあけた灰原を見た時は、オレも同じような気持ちだった。その後、急いで担当医に報告しに来たわけだ。

医師は、レントゲン写真を置き、ボールペンを胸ポケットにしまつと、

「早く行きましょう」と個室を後にした。

どうやら、灰原はマジでやばかったらしいな。

肩、脚、腕、腹、背中。

全てで5ヶ所に銃弾が当たった。出血多量。

なんとか、致命傷となる部位にはあまり当たらなかったのが幸이었다。

それと、早く病院に運べたのも助かった理由の1つ。  
蘭が通報してくれたようだ。

『やっぱり気になって、あとを付けちゃったんだ。ごめんね』

後で言っていた。

感謝もしたけど、それを聞いた時の俺は、ドキドキしっぱなしだった。

もしかして見られてねえだろな……？

まあ、俺は悪くねーんだけど……

それより、キスされて満更悪い気持ちでもない俺って……どうなんだ……？

これ、罪悪感だよな……？

思い出すのは、あのキスのことばっかで。

まだまだ子供なんだな、俺って………実感させられちまう。

告白か

答えは出さなきゃいけない。  
生半可な気持ちで、二人とこれから付き合っ  
てはいけなーから。

ハハハ……どうも推理のように、上手くいかねーんだな。  
…恋愛は。

「灰原、医者連れて来たから。…入るぞ？」  
前置きしてから、『灰原哀』と書かれた札がかかる病室の扉を開  
けた。

前に研究室に無断で入った時、灰原の顔がオニになったのを覚えて  
いた。あれから、つい癖になっている。

「…あ………」  
入ると、白いベッドの中で安らかに眠る灰原がいた。

「おい！！灰原！」

俺は急いで灰原に駆け寄った。まさか…死んでるんじゃ…

「大丈夫ですよ、工藤さん。心臓はちゃんと動いていますから」

医師は苦笑いを浮かべて、取り乱すオレを宥めた。

よかった……と俺は息を漏らす。なんだ、ただ寝てるだけなのか。

「…それにしても、目を覚ましたのは本当のようですね」

担当医は、心電図の心拍数や脈拍を見た。

本当のようですねって…

オメー、疑ってたのかよ？

俺が白い目で担当医を見た時、トントンとドアを叩く音がした。

俺は大きな声を出すわけにもいかなく、そつと扉を開ける。

「…蘭」

「新一っ…！哀ちゃん大丈夫…！？」

蘭はカーディガンにスカートで、片手に花と紙袋を抱えていた。

「しーっ。…灰原寝てるから」

「あ、ごめんっ……」

蘭は頬を赤らめ口をつぐんだが、次の瞬間目が大きくなった。

「寝てる……？……えっ！哀ちゃん、意識戻ったんだ！？」

「ああ……」

「そっかぁ……。よかった……ホントによかったぁ……」

自分のことのように喜べる蘭は、マジでいいヤツだ。  
気がつくくと、蘭の目が鬱すら潤んでいる。

「ねえ……新一？哀ちゃんは意識戻って良かったんだけど……」

「ん？」

「……もっと自分のことも気遣って……？」

思いがけない台詞に、俺は？マークだ。

「新一、ここ3日寝てないでしょ？もっと自分の体も労らなきゃ……」



…新一が倒れちゃうよ…」

蘭は心配そうに俺の顔を見る。

「蘭…」

「そうですね。この子の容態は安定しているようですし、工藤さんはあとお休みください。このところ睡眠をとっていませんでしたよね？」

「あ、ああ」

結局、蘭の言うことに背中を押され、俺は休むことにした。

あんな顔で言うなよ……

相変わらず、あれには弱い。

灰原の意識が戻り、蘭と会った今……タイムリミットが近づいてきた。

FILE：23 戻りし灰原（後書き）

ホントに、他の連載ストップしてすみません！  
完結したら、また更新したいと思います。

蘭ちゃんいい子だなあ。

哀ちゃん見ると泣けるなあ。

なんて思いながら書いてます。

次回もよろしくお願いします。

あ、あと！

続編ある予定です！

内容も大分決まっています。

それでは、^o^ /

FILE：24 新一の想いつて…（前書き）

すみません、前書き付け足しです。

FILE：24は、23の前くらいの蘭のお話です。  
説明不足ですみません。

FILE：24 新一の想いつて…

新一の部屋の中。

私はクローゼットをあさる。

別にストーカーとか、泥棒やってるわけじゃないよっ…!？

今から病院に行くから、新一の着替えを持って行ってあげようと思  
つて。

新一…

哀さんに付きつきり。

徹夜で寝てないみたいだし、

新一は哀さんの手をずっと握っている。

ちょっと…ううん、すごく妬ている。

哀さんの命が危険なことは知っている…けど、妬いている。

哀さんのことをただの小学生では見られなくなったから…？

ちがっ。

哀さんに新一が付きつきりな訳が、心配なだけじゃない気がするか  
ら。

服を畳んで袋に入れる作業を中断して、ため息一つ。

「なんで、あんなもの見ちゃったんだろう…」

そう、なんであんなもの…

あれから何度後悔したんだろう、わたしは。

哀さんのことが心配。

助かって　　お願いだから…

見ちゃったモノ、

新一と哀さんのキス。

私が後をつけて、勝手に見たのが悪いんだけどね…。

新一を信じて見送ると決めたはずなのに、やっぱり私はじっとなんて、していられなかった。

こっそり尾行してみると、そこは古びた廃ビル。

入口から何メートルか離れていたところで見ていて、犯人と新一と哀さんの会話までは聞こえなかった。

けど、銃声だけは聞こえる。  
バンツバンツ

最初の一発がした後、立て続けに。わたしは急いで携帯で警察と救急車を呼んだ。

…そしてしばらくして、何も聞こえなくなった。

気になって中を覗くと、  
新一と哀さんがキスしてたわけだ。

絵になるみたいに、きれいで。

本当なら、泣き崩れて、当分引きこもっちゃうかもしれない。  
今わたしを支えているのは、

『俺は蘭が好きだよ』

あのコトバ。

今日は服を届ける、哀さんのお見舞い…それだけじゃないの。

新一の答えを聞こうと思って行くの。

新一の想いを……

新一はどっちが好きなの…？

胸の内を聞かせてほしくて…

よし…！

気合いを入れ直して、  
私は新一の家を出た。

新一の”想い”が、わたしと同じであることを願います



FILE：24 新一の想いつて…（後書き）

蘭ちゃん！哀ちゃん！

どうなるんだろう、二人。

新一、本当にしっかりしてほしい。思わせぶりな態度とか！……私のせいだけ。笑

前話はすみませんでした。

次回もよろしく願いします！

30話以内には完結する予定です。

灰原の看病をやめて、休むことに決めた俺。  
今、蘭と2人で公園にいる。

「…はい」

自動販売機から買って来たであろう缶コーヒーを、蘭が笑顔で差し出す。それを俺は両手で受け取った。

「ありがとな」

蘭から手渡されたコーヒーは、冷たくて、眠気覚ましにはピッタリだった。

蘭は笑って俺を見る。

数日前、死を覚悟した時とは、大分違う心境。

……幸せだ。

「…新一」

景色に目線をやっていたら、ふと蘭が声をあげた。

「なんだ？」

「……あの……さ……」

蘭は言葉を切ると、苦笑いを浮かべ、

「哀さんを誘拐した犯人って捕まったんだよね……！？」

「あ、ああ……？麻酔で眠らせといたからな。犯行も自供してるみてえだし」

明らかな蘭の不自然さに、首をかしげる。

「けど、問題はアイツだな。灰原がどう思うか、だ」

「え……？」

「確かに犯人は悪いことしたかもしれねーけど、その原因をつくったのは灰原だから……」。

灰原には、やっぱり罪の意識はあるよな」

「…そ…うだね…」

蘭の返事は寂しげだった。

「…それにしても、蘭…よく割り切ったな」

「何が？」

「いろいろ…な。俺の正体とか、今までの真実とか…。普通じゃいられなっちまうんじゃないかねえかな、って」

「ああ…そうだよな。私…変だよな…？なんかいろいろ私の中で出来事がありすぎて…頭が回らなかつたっていうか…」

ハハハ…と苦笑いする蘭。

やっぱ、おかしい…

俺が蘭の表情を伺おうとしたら、蘭はスクツと立ち上がった。

その後ろ姿がどこか切なくて、今すぐ抱きしめたくなる。

「ねえ…新一…？」

「あ？」

「わたしってさ…新一のどこに入るの…？」

「え……」俺から出てくるのは、齒切れの悪い文字ばっか。

「……新一は、わたしと哀さん……どっちが好きなの？」

蘭からそんな言葉が出てくるとは思わなくて、無性に鼓動が早くなつた。

考えてたトコを突かれたのもあるけど。

「なんだ、それ……」

蘭が振り向いた。

え？という顔で。

俺の口調が強すぎたのかもしれない。

「だからっ……何で……んな事聞くんだよ……」

そう言っつて俺は蘭を抱きしめた。

腕の中にある涙もろいヤツは、またもや、そのきれいな目から涙を流している。

俺は寂しかったんだ。そんなことを蘭が聞くから。

俺は自分の気持ちを、自分なりに伝えてるつもりだったから。灰原を助けに行く時だって、俺はちゃんと伝えたはずだから。

『好きだ』と。

「新一が……好きだよ……わたしは……恋愛感情で好きだよ、大好きだよ……」

けど、新一は最近……わたしより哀さんのことを考えてる……」

俺の腕の中、涙声の蘭は必死に訴える。

「……時々、新一の”好き”はわたしと一緒になのかな、って。思う時があるの……」

好き……一緒……？

どういう意味だ？

蘭は俺の胸から離れて、笑って言った。

「新一……好きには2種類あるんだよ？恋愛感情で愛しいの好き、人間として好き……の2つ」

蘭の長い髪が風でなびく。

俺はフツと笑った。

頭の中にピンと張られた糸。

霧が晴れていくようにすすきりしていく。

…よくわかったから。

蘭、ありがとな。

「蘭、ごめん。ちょっと行ってくるな！」

俺はそう言い残すと、灰原のいる病院へと走り出した。

FILE:25 &quot;好き&quot;の種類(後書き)

テスト近いので、更新回数減ります( ; ) 多分。

勉強やだなあ。どうすれば、やる気をアップできるんですか？

気を取り直して。

駄文でしたね、今回の話は特に……( ; )

こんな私ですが、次話もよろしく願います。

次は哀ちゃんです！



FILE：26 答え

ガラッ

病室の扉が開く。

息を切らせた彼が、そこに立っていた。

今しがた起きたばかりの私は、ぼやーとした頭だったけど、  
彼が来たことにより、見事に頭の中は晴れてきた。

「灰原！」

頬から汗が流れる彼を見て、ほほ笑む。なんかおかしいわね。

……答えが見つかったのね……？

彼の表情を見て、人目でわかった。けど、そんなことは胸の中に秘  
めておく。

「どうしたのよ、そんなに急いで」

「あ、ああ。お前に言いたいことがあってな」

……やっぱりね。

「座って」

私が言うと、彼はイスに座る。

わたしは彼の顔を見据えた。

心の中の蟠りが消えたような、晴々とした表情。

明らかに寝不足な顔は抜けない。

それと…頬に一線の傷痕。

胸が痛む。

これは私のために彼が受けた傷。犯人に撃たれた傷だから。

「傷になってるわね…」

「キ、キス…!?!」

彼が素つ頓狂な声をあげる。

「バカね。傷よ、キ・ズ」

「ああ…傷か…。こんなのオメーのに比べたらどつってことねえよ」

安心したのか息を漏らして、工藤君は言った。

本当にバカ……

意識しすぎなのよ。

まあ、その原因を作ったのは私だけど。

本当に焦る彼を見て、笑みがこぼれてしまう。

「あなたって、子供ね」

「はあ！？今はオメーのほうがガキだろ」

「…なんでもないわ」

違う意味なのに…とわたしは呆れる。

「なんだそれ」と目を丸くする彼を見て思った。

やっぱり…彼が好きなもの、わたしは。

身体がそう反応するの。

笑みだって、涙だって、キスだって、告白だって……

彼の前にいると、自分が抑えられなくなる。

嘘泣きすら、必要ならばいくらでもする私なのにね…？

わたしは彼の傍にいるとき、ホントに”幸せ”だと思えるの。  
これが、ホントの幸せなんだと思うの。

彼より、私のほうがバカなのかもね？

「それじゃあ、名探偵さん？

聞かせてもらいましょうか、あなたの答えを…」

私は彼をからかう口調で言ってみせた。  
言いにくそうだったから、わたしから切り出す。

焦ってばかりの工藤君の顔は、いつしか真剣になっていて。  
ちゃんと答えを考えてきたんだ、と思う。

こんな真剣な表情も好き。

「ああ」

張り詰めた空気。

「灰原……俺さっきまで悩んだ、自分の気持ちを」

「……………」

「俺、灰原のこと好きなのかもしれないって思ってたから」

『思ってた』って……？

「灰原にキスされて、異様にドキドキしてたし、守ってやりたいって思ったから。」

けど、それと同時に蘭も好きな自分がいて……。なんかよくわかんなかった」

正直、嬉しかった。

でも過去形のような語り口調。

「さっき蘭に言われて気づいたよ。」

”好き”には2種類あるんだってこと。

それと照らし合わせて考えた、俺が愛しくて、大好きな人」

不思議と、鼓動はゆっくりと音を立てていった。

FILE：26 答え（後書き）

今回は新一と哀ちゃんの対談を入れたくてつくったんですけどf^  
|^;:;:どうでしたか:;:?

この話、二人が話す時ってあんまりないんですね。  
ほのぼの系じゃないというか:;:。  
次回もよろしく願います！  
あと予定では、3話です！

FILE：27 未来への助走

もう、わかっている。

体だけは正直だったみたい。

体がひんやり冷たい。

「俺な……」

「ええ」

「俺、蘭のことが”愛しい”っていう意味で、好きだから」

「……ええ」

ちゃんと喋れただけでも奇跡。

心の中は、砂漠のように渴いていくから。

前からわかってたはずの答えなのに

やっぱり苦しくて

心の中では彼にいつも甘えている。

期待通りに、上手くいくんじゃないかって。…馬鹿な考え。

彼は弱虫。私への気持ちじゃなくて、蘭さんへの気持ちを言った。

……気遣いなのかもしれないけど、正直に言ってほしかった。いつもなんだから、こんなときくらい。

「灰原は大切な仲間だし、相棒として、好きだぜ？」

彼は真っ直ぐな瞳でそう言った。嘘ではないみたい。

嬉しい、いつもなら。

今は哀しいだけ、虚しいだけ。

「…ありがとう」



そうは言ってみただけど、死にたい気分だった。

彼を好きでいることで、わたしは自分の存在意義を示していたのかもしれない。

ひよっとしたら、彼を好きでいることで、自分を美化していたのかもしれない。

わたしも人間なんだ、

そう思えた恋だったから。

駄目：

彼を見てると涙が零れそうで、そんな姿見せたくなくて、シーツで顔を隠す。

こんなことをする私は子供みたい。

「オメーは必要とされてる、俺もしてる」

「……………」

「オメーは一人なんかじゃない」

「……………」

「オメーの居場所だって、ちゃんとある」

「…そんなの立て前」

「なっ…」

「そんなの立て前」

放心状態の私は、もう一度繰り返した。

彼が黙り込むから、私は我に返る。

涙でぐっしょり濡れたシーツを、ただ握りしめながら。

今までの私の気持ちができる人なんていない。

普通に生きてきたかった。

居場所がほしかった。

待っていてくれる人も。

愛してくれる人も。

あなたが傍にいてほしかった。

掴まえたと思つたら、また手から逃げていく、”淡い幸せ”。

我がままなのはわかってる。

「……ごめんなさい。ただの八つ当たり」

「だよな」

「えっ？」

「俺、結局。オメーの気持ちを完全に理解はできねーもんな」

「……………」

何よ、それ

「前も灰原に言われたよな。『あなたに私の気持ちなんてわからな  
い』って。確かにその通りだよ」

工藤君の優しい声は、ずるい。

「けど、俺が今言ったことは立て前なんかじゃない。俺はオメーが

立ち直るまで傍にいる。

俺には灰原が必要だ。オメーの居場所もちゃんとあんだろ？」

わたしはやつと顔をあげた。

工藤君は私の頭を撫でた。こんな姿だと、兄妹みたい。

こんな行為や言葉だけで、  
私の心は温まる。

「わたし…一人で歩けるかしら……」

「一人じゃなくていいんだよ」

「……もっと甘えていいの……？」

「おう、もっと甘えろ！」

「…幸せになっても…いいの…？」  
もう涙が止まらない。

「当たり前ーだろ」

工藤君は私の涙を拭ってくれた。

「オメーも幸せになれよ。  
オメーも自分の幸せ見つけろよ」

正直、まだ不安。

あなたへの想いを断ち切れるか、  
あなたがいなくても幸せになれるのか、  
強がってるつもりだけど、

本当は脆いわたしでも独り立ちできるか

窓から、あなたから、  
温かい日差しが差し込む。

「工藤君……」

「ん？」

「今まで、ありがとう」

FILE:27 未来への助走(後書き)

悩みました、この話。

とても大事な話なので、これでいいのかなあと。

短すぎたかな…と反省しております。

哀ちゃんの気持ちを1話では、表しきれないような気が…  
哀ちゃんの性格…こんなんでしたっけ… f ^ | ^ : ; ?

ラスト2話です！

最後までがんばります。

感想がありましたら、よろしく願いします。

FILE:28 見守ってる(前書き)

新哀派には最後のほう、ちょっとキツイかもです。



『もう大丈夫だから、出てっついていいわよ』

彼女の口から漏れた言葉。俺は素直に病室を出た。

眠気のせいか足どりは重く、家路を歩くにもフラフラしっぱなし。

しかし俺の心の中は、意外にも晴れ渡っている。

”好き”と”好き”の狭間に揺れていた気持ちからやっと解放された。

灰原も好き

蘭も好き

この2つの想いの真相が、やっと掴めた。

俺は蘭のことを愛している。

灰原のことは、相棒として人間として好きだ。

灰原の告白には本当に戸惑った。半分、不覚にも嬉しかったけどな。

アイツの冷たい態度、俺に尽くしてくれていたのも、蘭を避けていたのも…

俺を好きでいてくれてたから。

俺はそんなことは、微塵も気づかず接してきた。嫌なヤツかもしれ

ない。

俺の気持ちを話した後、  
灰原は涙を流した。シーツの中で、見られないように。

こんなときにまで強がなくなってもいいのにな。

本当は優しく、誰よりも周りのことを考えて、強いけど内面は弱  
かったのかもしれない。

いつだって自分を奮い立たせていたのかもしれない。

「まだ青いな」  
空を見上げて思う。

まだ明るい昼過ぎだ。そーいや、昼飯食ってなかったな。

こんな空のように、  
俺もまだ青い。

灰原には『逃げるな』だとか『幸せになれ』だとか、  
勝手なこと言ってるけど

そんな自分はどーなのかよくわかんねえ。  
灰原や蘭を泣かせちまう、青二才。

灰原？けどな、さっき言ったことに偽りは1つもねえから。  
オメーには幸せになってもらいてえから。

立て前……そう灰原に言われた時は、異常なほどに寂しかった。  
幸せや温かい何かを、素直に喜べないアイツが不憫でしかたなかった。

だから最後にオメーが言ってたこと、初めて頼られた気がして嬉しかったぜ？

ぼー…と上を見ながら歩いてみると、後ろから声が聞こえる。  
近づいてくる音…その方向に振り向く。

「新一！」

「蘭？」

「新一っ、何で置いてくの！」

「あ」

そーいや…公園に待たせといたまんまだった。

「そこで新一見つけて、急いで走ってきたんだ。間に合ってよかったあ」

蘭は「ま、いいや」と機嫌を取り直すと笑顔で言った。  
それを見て、俺の顔も綻ぶ。

「あ、蘭……」

「新一！あのさ…その…さ…」

蘭は俺の言葉を遮ると、もじもじして言う。

「ん？なんだ？」

そう問い掛けても、尚ももじもじする蘭を見て、俺はフツと笑った。

「蘭…もう、大丈夫だからよ。心配すんな」

蘭は頬を紅潮させる。

「べっ、べつに！そんなこと聞いてないわよっ！」

「そんなこと」「ってどんなことだよ？」

必死に否定する蘭を、悪戯っぽくからかってみた。おもしろい。

「え…」

余計顔を赤くする蘭。

「嘘だよ。蘭、好きだからな」

「え…え…」蘭、しどろもどろ。

「ま、帰るか？」

「うん！」

蘭は俺が幸せにする。

灰原、俺はオメーが選んだ道を全力で応援する。

幸せになるように願ってっから。見守ってっからな

…

FILE:28 見守ってる(後書き)

次回、最終話です。

続編もあります。

一応伝えますね f ^ | ^ ;

新一と蘭の息子と哀ちゃんのお恋物語です！

次回もよろしくお願いします！

FILE:29 新しい道(前書き)

遂に最終回です!

朝の朝食をゆっくり済ませ、  
髪をとかして鏡の前に立つ。

今日からまた小学校に通う。  
それは私が選んだ道。

鏡に映る、この小さな自分で在りつづけることを。

宮野志保に戻ったからといって、わたしにとって何も変わらない。  
唯一の肉親、宮野明美もこの世にはいない。

”宮野志保”の存在を待っている人は、誰ひとりもないのだから。

それなら、少女のままでもいい。  
待っていてくれる人、  
私を好きでいてくれる人がいる、この姿で。

彼にそれを告げる電話をした時、彼は動揺してたけど、『がんばれ  
よ』そう言ってくれた。

嬉しかった。  
いくらでも頑張れる。

正直、灰原哀になってから得たモノのほうが多かった気がする。



大切な仲間も、  
居場所も、  
楽しい時間も、  
人を愛せることの嬉しさも…

今までの痛みを埋める幸せは、これだけで満足なのに。  
欲張りな私は、この幸せをがもつと欲しいと思ってしまう。

『あなたは誰なの？』  
思えば、前のような疑問を抱くこともなくなった。  
小さくても、大きくても、  
私はわたしだから。

…過去に起こした犯罪の数々も、決して拭えるものじゃない。

一週間前、  
例の誘拐事件の犯人の息子さん、小林晴夫さんのお墓参りに行って  
きた。

そして、印刷会社の社長さんのも。印刷会社の社長は、やはり組織  
に殺されたらしい。社長も何か秘密を知ってしまったのだろう。

私なりの、罪ほろぼし…？

いいえ、まだまだ足りないくらいだと私は思う。

「…オメーがこれから真つ当に生きることが、一番の罪ほろぼしだぜ…」

工藤君の受け売りを呟いてみる。

頑張ろう、と思えてくるのは気のせいじゃない。重荷が軽くなった気がした。

本当に最後まで…

彼には救われっぱなし。

前に、

彼の言葉はわたしの中心を回  
って思ってたけど、逆だったの。

彼の言葉の中心をわたしは回っていたの。

ピンポン

インターホンが元気よく鳴る。

新しい門出を祝っているようだった。

「哀ちゃん！」「吉田さんの声が聞こえる。

ソファに置いてあるランドセルを背負うと、

「行ってくるわね」

博士に挨拶。

「ああ、行つてらっしゃい」

私の笑顔に、博士までも笑顔満開にしていたことを、私は知らない。

工藤君、蘭さん

お幸せに

工藤君、私はあなたに助けられてばかりだった。

これからは幸せが似合う人になってみせるから。

本当にありがとう。

今までもこれからも、

私に光と春を与えた、

貴方のことがずっと好き。

これからは自分の決めた道を歩んでいく。

ドアを開けると、吉田さんの笑顔が待っているから。

「哀ちゃん、おはよー!」

「ええ、おはよう…」

人にも少しは頼ってもいいのかもね？

温かい春が

私の心の中にも訪れた。

永遠に去ることがないくらいの、

あつたかい春が

…

二度と来ない春〔終〕

FILE：29 新しい道（後書き）

「二度と来ない春」完結いたしました。

私の連載小説の中で、一番長い物となりました！

最後の最後、満足していただけるか、とても不安ですが…

本当に約一ヶ月、ありがとうございました！

つまらない&駄文な小説であったと思いますが、ご閲覧して下さった方には、本当に感謝しております。

続編のことですが、

「新一と蘭ちゃんの息子と、哀ちゃんの恋物語」の予定でした。

けどやっぱり哀ちゃんには、新一しかいないだろう！

という勝手な解釈で、続編なしになるかもしれません。

そのかわり、新一と哀ちゃん（または志保）の話を書こうかなあと  
思います。推理や恋愛を入れたいと考えています。

長々とすみませんでした；

今まで、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2534/>

---

二度と来ない春

2010年10月8日14時22分発行